

(書評者)
育ちの支援オフィス
かんの木代表・保健師
新納美美

『ナイチンゲール伝 図説 看護覚え書とともに』

茨木保＝著

定価1,944円(税8%込)
[ISBN978-4-260-01840-1]医学書院



深い迷宮の入り口に導かれたような“等身大の彼女”との出逢い

●「知っている」とスルーしてはもったいない！

本書は、月刊「看護教育」に連載された漫画によるナイチンゲールの伝記に、その代表作『看護覚え書』の図説等が加筆され書籍化されたものです。

単に偉人を知るにとどまらない様々な読み方ができ、連載時からのファンも当時をはるかに超えた重厚感を覚えることでしょう。学術資料を参照した確かな内容でありながら肩凝り無用の柔らかな間（ま）が表現されているのも漫画のなせる技。そこには、彼女の人としての生活が感じられるのです。

著者は“神格化された彼女”ではなく“等身大の彼女”を描出することに力を注がれています。等身大の彼女との出逢いによって、教科書的に整然とした看護との対面時には感じることもない感覚を覚えます。それは、現在に至るまでに看護がつくり上げてきた広くて深い迷宮と対面する感覚とも言えるでしょう。

本書は、“知っているはず”の看護学にもう一度新たな関心を寄せるきっかけにもなる、まさに、長く連れ添った伴侶に惚れ直すような一冊と言えるでしょう。

●フローレンスの心の闇

本書には、フローレンスの心の内側をうかがい知ることのできる記述が多数みられます。

幼少期からみられる独特の気質、家族関係の問題、トランス状態、鬱……。クリミア後の彼女は、病んで引きこもったまま大きな仕事をこなしていきます。あらためて、1人の人間の才能は他人によって引き出され、生かされ、形になっていくのだということを感じます。己の魂を護るがごとく症状を呈し“死にたい”と言いながらテキストの世界で暮らす彼女の姿からは、心理社会的健康とは何かを考えさせられます。

そして、彼女が、自らの唱える看護を生かし続ける

ためのセルフケアにおいてもある意味で卓越していたということが理解できます。

「彼女がなぜ「天使」と呼ばれるにふさわしいのか考えていただけたらと思います」と著者はまえがきに記しています。精神看護を愛する者にとって含意の深い言葉です。

著者は、フローレンスの陰の部分の部分を淡々とした語り口調と、シンプルながら少々ユーモラスな絵で表現しています。正統派の写真のように光と陰のバランスがよい表現には、心に闇を抱える人への愛すら感じられます。その治療的とも言える著者のまなざしの理由(わけ)が、あとがきを読むことで腑に落ち、読み手に新たな感動を与えてくれるのも本書の魅力です。

●科学領域の起源を見つめることの意味

本書のもう1つの魅力は、看護学の起源を見つめられる点でしょう。ゼロが無限大と親和性を持つように、無から有が産み出された現象を見つめることには無限の可能性が秘められているからです。本書は、『看護覚え書』という“看護学の起源”とその内容を産み出したフローレンスの思考の基盤を垣間見ることのできる伝記が一体になっています。これらを一望することによって、フローレンスの思想が生まれた背景や、彼女の因果的な物事の捉え方の特徴など、看護学が大切にしてきた考え方の素顔が見えてくるようです。

科学としての看護学が課題とするものを抽出し、そこに真摯に向き合うのも今後の看護学の発展に求められるもの——。本書が一見、普通の漫画のような顔をしながらも、そのヒントが見え隠れするのが、学術書に劣らない重厚感の隠し味になっているのだと思います。

精